



休校が終わった時、感染予防の昼食を徹底するために、昼休みのない日課が始まりました。しかし、6年2組では、感染予防をきちんとしたり、昼食や清掃をきちんと過ごしたりすることで、昼休みを戻していけるのではないかと考えました。まずは、昼休みが本当にとれるのかどうか、試行期間を取ろうと考えました。

6年2組だけの試行期間を経て、高学年全体での試行期間を設けました。学級訪問をして試行期間の感想を聞いてみると、「昼休みがあったほうが、やっぱり楽しい。実現してほしい」といった期待が寄せられていることが分かりました。また「昼休みの時間が短い。短くて遊べない。」という意見もありました。

「昼休みがとれるだけでいいよね」、「現状では、これ以上の休み時間はとれないしね」、「それは、さすがに無理でしょ」、「ありえない」という子どもたち。その一方でSさんは、「私の前の学校は、週2でそうじしないで昼休みだけの日があったよ」と言いました。続けてHくんは、「A小は、水曜日は昼休みだけらしいよ。長野小はそもそも昼休みの時間が短いわ」とつなげました。

「長野小では無理でしょ」、「でも、昼休みが短いって問題は解決できる」、「他の学校の常識を取り入れてもいいかもよ」、「長野小の歴史が変わる」、「そうじはどうするの」、「そこを工夫して提案するのがいいんじゃないかね?」話は勢いづいていきました。

私は子どもたちの話を聞きながら、次のように伝えました。

試行期間のきっかけは、コロナ禍で昼休みがないことを疑問視したNくんの「昼休みを復活させたい」という提案だった。昼休みなしってという枠組みに疑問をもった時、それはおかしい、きゅうくつだって言える Nくんがいたこと。そしてNくんの提案に対して、「でもそうじだってきちんとしたい」「ただ欲しいっていうのはわがまま」という主張をした人がいたこと。そうして昼の時間全体を見返して、責任をもって先生方や他の学級に提案したこと。こうやって枠組みを自分たちの側からリフォームしたこと。枠組みは不動じゃなくて、疑問があったらリフォームを提案して作り直していい。でも自分勝手なリフォームじゃなくて、学校にいる全ての人に参加してもらう。こういうことを学んだみなさんは、昼休みを長くする枠組みについても考えられるはず。本気でやるなら、サポートしますよ。

ここでSくんは、「反対。そうじはきちんとしたい。」と言います。

「ジャムの袋とか、今は給食のあとに教室に落ちているのを、掃除の時間できれいにしている。毎日掃除をしないっていうのは問題」とHくんも続けます。本当に、昼休みを長くすることが、私たちにとってよりよい学校生活をつくることになるのか?子どもたちは、昼休みをめぐる、自分たちのよりよい学校生活のあり方を自治的に考え始めていると思います。この日のAくんの日記です。

今日、昼休みの話し合いが大きく動き始めました。竹内先生が「わく」をこえることについて言ってくれたことで、歯車がまわって一気に動き始めました。

学級訪問の結果をみんなで話し合っていると、そうじに遊びを持ち込むことの一因に昼休みの短さがあるという意見がありました。今の学校のルール「わく」をこえて、でも勝手にならないラインをせめて、楽しい、でも勝手にならず、学校が学校としての歯車を回せるように、うまくルールを組み合わせたいと思いました。今回の話し合いは、今までとは比べものにならないくらい大きな一歩になったと思います。

主張をしないことで、トラブルをさけ、波風が立たないようにする。私たちの通念上、大変重要な集団生活のマナーです。しかし、あえて主張し合い、ぶつかる中で解決策を探り当てていくことも重要です。“互いに少し不満だけど、うまくやっていく方向を見出す”というコミュニケーションによって、自分たちの集団における枠組みを、手作りしていくこと。これはとても自治的な営みだと思えます。

とはいえ、本当にこの日課は、現在の状況において好ましい日課になりうるのか?という疑問があります。独りよがりではない自治のあり方について、より一層考え抜いていこうと思います。